

研究ノート

日蓮本佛論の構造と問題点（一）

— 恵心流口伝法門との関係を視点として —

早坂鳳城

（現代宗教研究所主任）

はじめに

「日蓮本佛論」とは、言うまでもなく日蓮聖人（以下、日蓮という）を本佛と仰ぐ教説であるが、それが法華経や御遺文を歪曲したものであることには贅言を要しまい。日蓮を久遠元初自受用報身佛の再誕、末法の本佛とする、日興門流富士大石寺派の主張であり、室町以降の石山数学はこの日蓮本佛論を中心に展開したと言われている。

小稿は、この「日蓮本佛論」成立の背景について、従来よりその関係が指摘されている恵心流中古天台口伝法門との相関を検討することを通じて、論究せんとするものである。

一

日蓮本佛論は、大石寺の所伝によれば、日興に始まるという。しかし、日興の確実な著作とされる『御遺物配分事』には、

御本尊一躰釈迦立像⁽¹⁾

『興波木井實長書』には

仏は上行無辺行浄行安立行の脇土を造副進せて久成之釈迦に造立し進せ給べし⁽²⁾
などであり、興尊が久成釈尊を本佛とみていることは疑いない。

日興の弟子日目の跡をついで大石寺四世となった日道の『三師御伝』にも、

日蓮聖人云本地寂光地涌大士上行菩薩六万恒汀沙上首也、久遠実成釈尊之最初結縁令初発道心之第一御弟子也⁽³⁾
とあり、日蓮を本佛とみる思想の形跡は見当たらないと言つてよい。

抑も、九世日有に至るまで、大石寺に教学と呼べるべきほどのものが存在したかどうかについては、否定的に論ずることすら可能である。

開山日興は、大石ヶ原法華堂を開いて二年後には、重須北山に所を移し、本門寺根源として、その活動の中心拠点としてゐる。

興尊の滅後は、本六（長老）の筆頭日目が天秦に上京、不在中に、新六筆頭日代と弟子日妙と組した大檀那石川一族との間に争いが起き、西山本門寺が分立するに至つてゐる。

興尊の滅後十ヶ月にして、日師も旅先で入滅、大石寺蓮蔵坊の跡目相続について、日郷・日道の争いが起こり、その後両派の争議は七十年にも及んだ。その間北山本門寺は石川一族の外護で日妙を擁立し、西山本門寺は日代を擁立し、大内一族が外護、久妙両山（小泉久遠寺・保田妙本寺）は日郷を擁し南条一族、笹生一族が外護して、発展してゐたのである。

各山本末の発展に比して、大石寺は日道以降衰退の一途をたどつた。

こうした暗黒時代にあつて、大石寺九世日有は、白山顕彰の為に、板本尊を偽作するに及び、種脱勝劣の立場から

日蓮本佛論を創唱するに至るのである。すなわち『化儀抄』において、

一、当宗の本尊の事、日蓮聖人に限り奉るべし、仍今の弘法は流通なり、滅後の宗旨なる故に未断惑の尊師を本尊とするなり⁽¹⁴⁾：

一、当宗には断惑証理の在世正宗の機に對する所の釈迦をば本尊には安置せざるなり、其故は未断惑の機にして六即の中には名字初心に建立する所の宗なる故に、地住已上の機に對する所の釈尊は名字初心の感見には及ばざる故に、釈迦の因行を本尊とするなり、其故は我等が高祖日蓮聖人にて在すなり、……⁽¹⁵⁾など主張している。

しかし、日有の日蓮本佛論は教学的にまだ聖束したのではなく、日蓮本佛論が現今みられるようなものに完成され、石山教学が確立するには、二十六世日寛を俟たねばならなかった。⁽¹⁶⁾日寛は、大石寺派の獨自性が薄れ、北山・西山の兩派に埋没してしまうことに危機感を持ち、自派の教学を宣揚するために日蓮本佛論を主張するに至ったものであろうと思われる。

一一

さて、日蓮本佛論の思想的基盤には、恵心流中古天台の口伝法門に依拠するところが多いことは夙に指摘されているところである。

いま、試みに、中古天台に於ける各論師の著作の中から、日蓮本佛論が依拠したであろう説論の幾つかをアトランダムに上げてみよう。

俊範『一帖抄』

問云。今止觀顯・天台内證歟。自佛相承之歟。

豪海『藏田抄』

傳云。諸佛内證秘密事アリ。是止觀也。故釋尊一代間不出之。說教事畢後。於金館出兩足。是止觀也。迦葉存之。以天台大師今已心中所行止觀故。有教觀一。教相承云法華宗。已心中所行止觀云天台宗。

尋云。何名天台耶。

傳云。止觀宗是也。伺釋意。天者巔。元氣未分。台者星也。天三台星是也。此星鎮居天。天星同時也。天止也。台觀也。止觀同時也。天台即止觀也。未分天處三台星雙。豈寂照同時非。止觀事顯姿是也。

尊海『二帖抄』卷上

仰云於止觀宗旨宗教二相傳有之。宗旨者三千三觀已證也。天真獨朗止觀宗旨也。止觀宗旨以天台宗名之也。尊舜『二帖抄見聞』卷下

附文行相二種止觀有之。附文宗教。行相宗旨也。其行相者一心三觀一念三千也。或一佛不現前法體。法界緣起内證。以前代未聞止觀名宗旨。一佛出世轉四教五時法輪以來取宗教也。或大師已心所行内證宗旨云。借經論說方宗教云也。或宗旨天台宗。宗教法華宗分分別也。

尋云。法華宗天台宗不同如何。

仰云。於止觀教學觀學相承不同也。教學血脈云。大覺世尊迦葉阿難等傳二十三祖乃至惠文南岳等傳受宗教分。法華宗相承也。多寶塔中大牟尼尊直傳惠文南岳乃至末代今至開一念三千悟靈山一會儼然未散直從塔中釋迦傳某甲云觀學血脈也。天台宗分也。仍以教觀相承兩宗異分別時。一義就天台判釋三大部能釋不同也。玄義文句法華宗分也。止觀天台宗也。サレハ天台宗云止觀宗云事也習也。…中略…

一義云。宗教者一代説教乃至至當根一偈一句聽聞。能所封論分皆是宗教也。天眞獨朗内證直達宗旨也。等海『等海口伝抄』第四

心賀御義云。於止觀宗旨宗教二相承有之。宗旨者天眞獨朗也。智一心三觀也。此止觀宗旨云〔止觀〕大旨也。

…中略…

宗旨者一念三千也釋。以止觀宗旨名天台宗也。

『同上』第四

尋云。前代未聞止觀觀者。依法華立之歟。心賀御義云。止云。此之止觀。天台智者說己心中所行法門矣。内證不思議止觀故。別依法華不可定。天台宗義者。天眞獨朗體也。天眞獨朗者。前代未聞止觀也。説己心中所行法門者是也。本覺三千也。天台宗者元氣未分處立之宗也。

以上に説かれているのは云うまでもなく止觀勝法華の法門であるが、そこには天台宗勝法華宗の主張がなされており、つまりは止觀天台勝釈迦法華の解釈がなされると云え、特に、③⑨⑫においては天台勝釈迦の主張が謳われていることが領解されるところである。

三二

筆者は、或る天台宗教師から、仙波檀林の口伝に「天台本佛・釈迦脱佛」の思想がある旨の教示を受けたことがある。もしこれが事実であるとする、石山教学に於ける日蓮本佛・釈迦脱佛の主張は、これを換骨奪胎、というよりは、盗用した教説である蓋然性が高いであろう。

一海の『八帖抄見聞』には

相承口傳者。今師金口相承也。金口相承。佛大迦葉乃至我等相傳。是教學血脈也。次今師相承者。天台開悟御内證爲本見。南岳内證不違。南岳内證惠文同。乃至佛内證不背今師相承習也。此天台内證爲本。直授相承有之。是觀學血脈次第也。

とみえ、等海の『等海口伝抄』第四にも

今師者指天台大師也。今釋金口今師共。釋經卷相承方。今師相承。知識經卷二相承共有之也。而知識經卷相承共天台今師。此今師爲本作相承事。今師内證止觀外。無三世諸佛師也。止觀是三世諸佛師。本佛行因相也。故今師爲元祖。列〔知識〕經卷相承習也云。

とあり、また、

俊範御口傳云。當流至極大事也。今本文不習者。何處可有之耶。弘云。在因必籍師保。果滿稱爲獨悟。以此因果。共爲諸師所承元祖矣。此釋口傳文有之也。傳解行機。從因向果人故。有師所論師保也。果滿稱爲獨悟處直行人。無師處直行也。此人果滿直悟直爲元祖。論相承也。所詮以此因果。共爲諸師所承元祖云處口傳。今師相承知識相承。不絶處習也。直果滿爲元祖。自是天台直傳三觀秘法。若然者天台已來。亦知識相承更無断絶。今先如此。果滿處直爲元祖證據以。出之口傳也。此外天台直果滿如來。塔中金言直授。相承不絶證據。自他宗無異論文證可出之。ともみえる。

金口・今師の二つの相承を立て、金口相承は釈迦佛より大迦葉等々を経て天台の末師に至るまでの教学の血脈とし、今師相承は天台の開悟の内証としての観学の血脈であるとする①。金口相承は従前向後の相承であるのに対し、今師相承は従後向前の相承であり、今師たる天台を本とした相承であって、今師の内証の止観は、三世諸仏の師であり、本佛行因の相である②。従って、今師たる天台は果滿直悟の元祖である③とする。

日 寬 說			
文 上 脱 益	法華經	法	正 法
	釈尊(脱佛)	人	
	一念三千	法	像 法
	天台(脱佛)	人	
文 底 下 種	題 目	法	末 法
	日蓮(本佛)	人	

※日蓮本佛・釈迦脱佛

仙 波 說		
法華經	法	教 相
釈尊(脱佛)	人	
一念三千	法	観 心
天台(本佛)	人	

※天台本佛・釈迦脱佛

う。
 ことここに至れば、「天台本佛・釈迦脱佛」への距離はあと一步であると言って差し支えないであろう。仙波檀林に「天台本佛・釈迦脱佛」の口伝法門が存在していたとしても、不思議ではあるまい。
 仙波檀林に天台本佛説が存在していたと仮定して、日蓮本佛論と対比して図示してみると、次のようになるであろう。

仙波檀林において天台教学の伝統に則って教観二門で捉えられているところを、正・像・末の三時に読み替えた上で、種・熟・脱の三益に改めて配当し直せば、日蓮本佛論の粗型が出来上がるのである。

四

次に、中古天台口伝法門にみられる用語と石山教学の日蓮本佛論にみられる用語との関係、関連についてみてみよう。

周知の如く、日蓮本佛は「久遠元初自受用報身佛」と表現されるところであるが、『二帖抄』には

自受用報身如來。以テ顯本ヲ爲ス正意ト也。⁽¹⁰⁾

とみえ、また、『二帖抄』巻下に、

以テ報身自受用ヲ爲ス顯本正意ト相傳ス也。⁽¹¹⁾

などとみえる。自受用報身をもつて本佛とするのは、まさに中古天台の口伝法門の焼き直しに過ぎないのである。

石山教学では御本尊七箇之相承として、「七箇の大事は唯授一人の秘伝なり」⁽¹²⁾などとして、七箇相承、七箇の大事を主張し、これを日蓮から日興ただひとりに伝授された法門とするのであるが、「七箇相承」、「七箇の大事」も中古天台口伝法門にしばしば用いられる用語である。例せば、



寂光大師

略傳三箇大事

圓教三身
 常寂光土義
 連華因果

心賀御義云。略傳三箇大事。開出於法華深義。習也。取合四箇三箇。爲七箇大事也。傳法要偈日。稟止觀大旨。學法華深義。諮一心三觀。具受心境義。兼稟達磨法矣。略傳文云。圓教三身。常寂光土義。連華因果矣。

〔等海口伝抄〕

傳云。當流相承次第。義科宗要上七箇大事習。前前當流天台法華宗相承脈目錄。四五紙卷物有之。此書計前代習畢。是七日精進傳授云…

…中略…

（七箇相承事）

傳法要偈云。稟止觀大旨。學法華深義。諮一心三觀。具受心境義。兼稟達磨法口傳云。學法華深義下法華大旨。涅槃大綱口傳給時。法華一切皆蓮華口傳。涅槃經一切皆寂靜相傳給へり。學法華深義下。適學佛性旨相承云是也。二經勝劣算下習也（〔八帖抄見聞〕）

仰云此二帖鈔云仙波圓頓坊法印。粟田口常樂院心賀法印方面授口決給處。一家大事也。其一宗大事者七箇相傳也（〔二帖抄見聞〕卷上）

一義云。座主必不可限道邃行滿。初從南岳天台至。當今七箇大事相承師皆可稱座主也。傳法書

者不^ハ可^レ限^ル。傳法要偈指^ハ七箇相承諸釋^ヲ也。^{〔二帖抄見聞〕}卷下）
などがあげられよう。

また、石山教学の切紙二箇相承には、次のような中古天台の切紙相承が影響を与えたのではないかと思われる。

師云。口傳云此頌塔中相承口傳也。代々不^レ載^セ紙面^ニ也。只境一心三觀。智境同體一心三觀等云授來也。總^{シテ}血脈^ヲ後印可狀^シ代々授^リ之。サレハ惠心都率授玉狀有^レ之。都率蓮實房授玉狀不^レ知^シ之。今此頌蓮實坊中島院主長豪授玉頌也。長豪已後紙面載^レ之狀頌云也。^{〔八帖抄〕}

相承云。一心所具妙法修德顯現佛示相承スル也。此事當流嫡流白紙口決云事相傳時顯事也云

…中略…

當流第一迹門。第九本門云義勢如上。付^レ之嫡流相承。第一第九書給^ハ一紙脈符有^レ之。深秘口傳也。^{〔八帖抄見聞〕}

一紙口決云

諸法融妙 二法未^レ生 住^レ一顯^レ一

三諦無^レ形 俱不^レ可^レ見 名^ク境一心

此一心即 天真獨朗 三千法爾

名^ク智一心 此智三千 本有長壽

此壽作用 四安樂行 是名^ク觀心

以此妙法 付^ス屬^ス而已^ト ^{〔等海口伝抄〕}第二

ところで、『等海口伝抄』第十二には、

心賀御義云。本門壽量心。以無始無終本覺佛爲本。故無始無終本有釋迦可有之。別尋釋尊本師無用也。有無窮失。上可成始覺故也。

とある。無始無終の本覺の仏は本有の釈尊であり、その他に釈尊の本師を尋ねるのは、無窮の失を犯すものであつて無用であり、始覺の釈尊を本師とすべきであるとの主張であるが、石山教学の「久遠元初」の自受用身の説は、こうした教説と類似した思考構造を有していると言えるのではないだろうか。

さらに、『等海口伝抄』第十二には、

當流住前習智一心三觀故。本因妙有住前習也。而約菩薩界論本因本果。約佛果論本因本果不同可習分也。

として、五十二位のうち住前を本因妙の範圍として、菩薩界に約して本因本果を論ずることを説き、

俊範御義云。釋尊本因行者。不輕菩薩也。此菩薩教導本來有善者方化他也。有界内穢土修行止觀方

自行也。是名本佛行因也。本因行時能化佛者。止觀本尊也。實相也。一心三觀也。阿彌陀也。無作三身也。

能化本佛無作三身也。本果佛云。成此佛也。無作三身者。別無名佛也。故經釋不出其名也。實伊所存

此定有之不審也。而本佛名有之。其佛種子有之。返返秘事也。

と、「本因行の時の能化佛」は畢竟「無作三身」であつて、「本果佛」もまた同様であるとの主張がなされている。

もともと「本化の菩薩」である日蓮が「本因妙の教主」であり「本佛」であるとする石山教学は、こうした考え方を継承し発展させたものであると推測されるのである。

以上の他にも、石山教学でしばしば強調され用いられる「唯授一人秘すべし」や「五百塵劫当初」などの言い回しも、

嫡流一人外更無口外。當流深秘口傳也。

や『同』第十二の

静明御義云。世間學匠。五百塵點最初實成事成時分。云本實成。云顯本也。其顯本其一也。舉事成本事。爲顯無作三身本方便也。

などの表現を踏襲したものである可能性があらう。

以上の恵心流中古天台口伝法門と石山教学日蓮本佛論との用語上の関係、関連について整理して図示してみると次のようになる。

<p>中古天台（恵心流）</p> <p>止観勝法華</p> <p>寿量品の内証</p> <p>自受用報身（天台）</p> <p>七箇の大事</p> <p>切紙相承</p> <p>本因行の能化</p> <p>嫡流一人秘すべし</p> <p>五百塵点最初</p>	<p>石山教学（日寛説）</p> <p>文底勝文上</p> <p>寿量品の文底</p> <p>自受用報身（日蓮）</p> <p>七箇の大事</p> <p>切紙相承</p> <p>本因妙の教主</p> <p>唯授一人秘すべし</p> <p>五百塵点当初</p>
---	---

(32)

おわりに

如上の考察は、必ずしも充分なものではなく、石山教学の日蓮本佛論が恵心流中古天台の口伝法門を基盤として成
立したものであることを十全に論証し得たものではないが、従前にも指摘されてきた両者の関係がある程度明らかに
出来たのではないかと思う。

今後は、更に両者の関係を詳細に検討するとともに、日蓮本佛論自体の有する構造上の問題点について、因果論、
本迹論、久遠論、佛身論等の観点から明証的に研究したいと念じている。

註

- (1) 『日蓮宗宗学全書』二卷一〇七頁
- (2) 同右・一六九頁
- (3) 同右・二五三頁
- (4) 『富士宗学要集』一卷六五頁
- (5) 同右・七八頁
- (6) 『日蓮宗事典』三〇二頁
- (7) 『天台宗全書』九卷四〇頁下
- (8) 同右・七〇頁上
- (9) 同右・一三三頁下

- (10) 同右・二四九頁上―下
- (11) 同右・三七九頁下
- (12) 同右・三八一頁下
- (13) 由比宏道氏もその著『毒鼓の縁』に於いて「日蓮本仏思想は元來、天台本仏思想の移行した即ち天台を日蓮に置きかえた法門」(二二〇八頁)と指摘している。
- (14) 同右・三三三頁上
- (15) 同右・三八五頁下
- (16) 同右・三八八頁上―下
- (17) 同右・四三頁下
- (18) 同右・一四二頁下
- (19) 『日蓮正宗聖典』三八〇頁
- (20) 『天台宗全書』九卷三四三頁下
- (21) 同右・三一九頁上
- (22) 同右・一六〇頁上
- (23) 同右・二六二頁下
- (24) 同右・三一七頁下
- (25) 同右・三四〇頁上―下
- (26) 同右・三五八頁下―三五九頁上
- (27) 同右・五〇二頁下

(28) 同右・五〇一頁下―五〇二頁上

(29) 同右・五〇二頁上

(30) 同右・四八一頁上

(31) 同右・五〇四頁下

(32) 本図の作成に当たっては由比宏道前掲書二〇五頁所収の図を参考にした。また、本図は対照教義の内容に於いて興門と他山では、異なる部分がある。特にここでは江戸中期以降日寛が確立した教学を指すのである。

※本稿は、平成九年十月二十四日、立正大学において開催された第五十回日蓮宗教学研究発表大会において発表したものに加筆したものである。